

# 医療安全対策で多角的な討論

## JASDIFフォーラムが初会合

山崎幹夫氏（東京薬科大学客員教授）らが発起人となり、医療安全対策を多くの職種間で横断的に議論する場として設けられた「JASDIFフォーラム」の第一回会合が七月三十一日、東京白金の北里大学薬学部で開催された。「医療安全対策を具体化する―製薬企業と医療従事者がなすべきこと」をテーマに、人間工学を初めとして病院薬剤師や看護師、製薬企業関係者など、さまざまな分野から問題提起や対応策が指摘された。

日本大学生産工学部教授の大久保寛夫氏は人間工学の観点から、医療業界の現状に欠けていると思われるものとして、①ユーザーの視点に立ったシステム設計②二十代、三十代の若手の教育・訓練③IT化④データベースの構築―を挙げた。特にデータベース化につ

いては、調剤する机の高さの適不適、従業員の疲労度調査などから始まり、「他産業では当たり前のデータが、医療業界ではあらゆることに關して全く収集されていない」とし、事故防止に欠かせない、働く環境に關する種々のデータを整備することが急務と語った。病院薬剤師の立場から

は、土屋文人氏（東京医科歯科大学病院薬剤部長）がチーム医療のあり方や、医療事故への対応策について講演。土屋氏は「医療機関の安全対策は、これまで医療機関内の対策でしかなかった」と指摘。「処方せんは医療機関から薬局への一方通行であり、双方向性がなく、調剤

情報を医療機関へフィードバックする体制がないため、処方変更が行われた際



さまざまな分野の専門家が討論

は、最低限、処方変更の際には薬剤師が介入し、カルテ記載の修正確認を行うべきである」とし、改めて薬業連携の重要性を強調した。

チーム医療については「最終実行者である看護師のことを考えなければ、本当のチーム医療とはいえない」とし、看護師への情報提供の必要性を強調した。また注射薬は、最低でも抗悪性腫瘍剤は薬

に、薬局が保管する原本と処方変更後のカルテで、不一致が生じることもある」と述べた。そうした事態を防ぎ、外来患者の安全を守るためには、「最低限、処方変更の際には薬剤師が介入し、カルテ記載の修正確認を行うべきである」とし、改めて薬業連携の重要性を強調した。

さらに病院薬剤師が取り組むべき課題として、手書き処方せんの読み間違いに触れ、処方せんの書き方統一を訴える前に、「こう書いてあれば薬剤師はこう読む」というように、薬剤師側が処方せんの読み方を統一した上で、医師に書き方の統一を提案すべきとした。楠本万里子氏（日本看護協会常任理事）は「これま

では看護師が、医薬品や医療機器について要望をしたことはなかった」とした上で、「実際に現場で使用する立場として、これからは薬剤や機器メーカーへのフィードバック、開発や選択へ積極的に参加していきたい」と発言。そのため製薬企業に対し、看護部へも情報提供するよう要請した。